

播州門徒の原点

軍師官兵衛が対峙した一向勢力とは何か

真宗文化研究室

NHK大河ドラマ・軍師官兵衛の話題が地元姫路では大いに盛り上がっているが、視聴率の方は今一つ、平準並に辛うじて留まっているらしい。官兵衛に焦点を合わせたストーリーだから、秀吉の中国大返しを最後に姫路とは縁がなくなると思うと寂しい限りである。

実は、英賀本徳寺も一向宗の拠点としてこのドラマに登場する。昨年の秋、亀山本徳寺はNHKによって占拠され、英賀合戦と石山本願寺の二つのシーンの収録があった。境内が毛利軍の軍旗で埋め尽くされ、「南無阿弥陀仏」や「進者往生極楽・退

NHK大河ドラマ・軍師官兵衛のロケーション



2013年9月26日・亀山本徳寺の本堂と境内を英賀御堂と石山本願寺に見立てて、NHK大河ドラマ・軍師官兵衛の撮影が行われた。／毛利軍による英賀御堂警護と石山本願寺の内部の2場面が収録された。毛利の紋幕が張り巡らされ臨戦態勢下の緊迫感が演出されている。

者無間地獄」などとかかれた幟が立てられていた。しかし、名号を幟としたかはいささか疑問である。「進者往生極楽・退者無間地獄」の幟は水軍の合戦では指揮を高める為に実際にもちいられた。

英賀合戦は、このドラマでは一つの構成素材ではないが、当時、石山本願寺を中心に全国ネットを構成していた。信長の天下布武の前には最初に解体せねばならぬ勢力であった。従って、信長・秀吉の対戦相手の背後には必ずと言って良いくらい一向勢力が関与している。

この機会に、中世の英賀を中心にした本願寺勢力の盛衰について見てみよう。『平凡社・世界大百科辞典・英賀合戦（新行紀一）』には以下のようにまとめられている。

播磨国英賀（現、兵庫県姫路市）の一向宗本徳寺を中心に、石山本願寺一揆の一環として羽柴秀吉と戦った一揆。英賀は中世後期に港町として発展した。はじめ播磨守護赤松氏の代官が支配し、やがて有力長衆三木氏を中心に自治的結合が成立した。十五世紀末に一向宗が伸展し、

NHK大河ドラマ・軍師官兵衛のロケーション



英賀に陣取る播州門徒が秀吉軍と戦いで用いられたとされる各種幟類。「進者往生極楽・退者無間地獄」の幟は志気高めのため一向の水軍が用いたものとして知られているが、「南無阿弥陀仏」の幟は名号本尊として礼拝の対象となるものであるから、幟として戦場で用いられたことはないと思う。

一五一五年（永正十二年）播磨教団の中心として一家衆寺院本徳寺が創建され、寺内町が形成された。門徒化した英賀長衆は十六世紀中葉に石山本願寺に出仕していた。石山本願寺一揆の時期には毛利氏と本願寺の中継拠点となり、門徒は一揆を起し、七十七年（天正五年）より中国経略を始めた秀吉と対峙した。秀吉は十四年四月初めより英賀攻撃を開始し、同二十四日に陥落、寺内籠城衆は船で退去した。一揆は門徒化した三木一族をはじめとする寺内町人と農民、および毛利方武士で構成されていたらしい。秀吉は英賀の町人、農民を新設の城下町姫路に移し、本徳寺も移転させたので寺内町英賀は消滅した。

英賀の寺内町としての性格を強調しているが、本願寺門徒のみの構成から、他宗派や神社を包含した形態のものまで多様である。英賀寺内にあった英賀神社の存在などは、石山本願寺と生魂神社の関係が参考になろう。播州には独自の在地性があり、一向宗寺院が過半をしめるがその他は多様な

英賀御堂鬼瓦



格納されていた箱の表には英賀御堂鬼瓦・天明六年六月仰せにより蔵入と墨守されている。この瓦は当時高名瓦大工の橋氏の作で、三木通明の寄進銘が刻まれている。永録九年1566年の英賀御堂の普請にあたり下り棟の飾り瓦として作製された。本徳寺が院家寺院の筆頭に勅許されるにあたり御堂の普請が施された経緯を裏付ける史料である。石山戦争が起こる4年前である。

宗派が混在していた。一方、寺内町の形成には自立した交易経済の存在が重要で、本願寺からの赤松氏への働きかけなどからみて、本願寺の各地に点在する寺内町と同様の特権を持っていたと見るのが妥当である。

いずれにしても、海に大きな権益をもつ三木氏の本願寺への帰属は真宗寺内町の交易体制をよく表すものである。この交易は広範な瀬戸内海交易であり、西日本の豊かな物産の消費地・近畿への動脈を形成していた。従って、毛利と英賀は内海をとおして接続しており、さらに続く大阪への海路は石山本願寺へと直結していた。

英賀合戦を読み解くには、この海が大きなポイントである。信長が中国、四国を統治するためには、瀬戸内海の上権をまず本願寺から奪取することが先決であったはずだ。この海上権の争奪は秀吉の中国平定と官兵衛の大返しの大業に隠されてほとんど知られていない。

さて、このような臨戦態勢下での英賀御堂にまつわる多くの遺産が亀山本徳寺に伝えられて往事を偲ぶことができる。『本徳寺英賀亀山之記』『播州船場本徳寺縁起』によれば、英賀のシンボル英賀御堂は一五一五年の本願寺連枝・実円の downward 際に

英賀御堂梵鐘・亀山本徳寺所蔵・大広間前庭



英賀長衆・三木通明が母の十七回忌の供養に寄進したもので、野里の鑄物師・安久の作である。これ以前に御堂の梵鐘が存在し、円教寺の宗徒により強奪されたことで知られている。この梵鐘は江戸時代に師万津八景の一つに数えられた亀山晩鐘である。

して建立されたようである。御堂は東向きに建てられ、南北九間東西七間と記載されている。今の亀山本徳寺の大広間より少し小振りである。位置は現在の歌野橋付近であったと言われているが定かではない。御堂を中心に厨房や書院が立ち並び、周囲には堂衆寺院の坊舎が薈を連ねていたようである。

信長が頭角を顕し地域の合戦に勝利して、尾張・美濃を手中に収めた一五六六年頃、播州では本願寺の西国の重要拠点として英賀の重要性が認識され、御堂の屋根普請が新築が施された。この時の英賀御堂の下り鬼が亀山に現存している。『永禄九年八月二十七日播州英賀東瓦大工之宗右衛門符作之亀倉橋又次郎』『三木宗大夫入道慶栄作之幽亀倉橋又次郎』と刻字されて、三木一族の長衆通明が寄進し、瓦大工橋氏の手によって作製された逸品である。さらに通明は母の一七回忌の報恩供養に梵鐘の鑄造を行っており、亀山本徳寺の大広間前庭に安置されている。

さらに、本徳寺のこの時代の法宝物目録に目を通すと、実如奉書の法然御影・太子御影があり、実円下附の七高僧系譜を始め、文化財である親鸞聖人御絵伝が散見される。その他には蓮如上人の名号や還相回向聞書などの書写本、本徳寺一世実玄連枝や二世実円連枝の聖教書写本の類が数多く所蔵されている。これらの歴史的遺産を調査・研究することにより、秀吉と軍師官兵衛による播磨支配以前に、本願寺が播州において進展していった経緯が明らかにされよう。

くしくも、今年九月から十一月の三ヶ月をかけて、兵庫歴史博物館で「播磨の本願寺展」が開催される。亀山本徳寺の所蔵の法宝物や遺物をはじめ播州から各地から当時の関係文物が展示される。黒田官兵衛の時代に英賀を中心に一向の念仏の教えがどの様に播磨に広がり西国にまで本願寺の教線が張られたのか、今に続く播州門徒のルーツをかえり見ることがができる。多に期待したい。

播州門徒追弔法要の由緒

播州門徒のルーツは中世に始まった英賀の門徒衆によるものである。信長・秀吉によって解体されたこの自律性の高い門徒の組織は、江戸時代になって、お寺に所属する檀徒というかたちで再構成された。亀山に移築された本徳寺も新たに再生される。江戸時代をとおして西国の録所として幕府の寺院行政に関わり、宗門内では播州の本山として寺院行政を担うと共に、播州の西派寺院や門徒の念仏信仰の中核的道場としての役割を担うようになった。

本末関係・檀家制度とは別の法流として、前時代から相承した念仏信仰がある。各所地縁によって出来た寄り合いとしての念仏講がそれである。現在でも残存する歓喜講をはじめ二十五ほどの講が存続している。本徳寺護持の潜在的な活動であったように考えられる。これらの自律的な講の活動や、新しい宗門組織としての本末・檀家制度下で、本徳寺の世話役が播州各所に選出され、懇志を集める一合講が組織され本徳寺の行事会計がまかなわれていた。

また、江戸の中期に門徒の遺骨を埋葬する墓地の開発が進められ、西播を中心に真宗の門徒が本徳寺に分骨するようになった。節談説経による布教も盛んに行われ、多くの門徒が亀山の御堂に参集して後生の一大事を明らかにしていった。このような関わり合いを通して、播州一円の門徒の信仰の拠り所として亀山御坊が成り立っていたのである。

近代になって日本は戦争の時代に入ると、一九〇〇年五月二十六日、亀山に明如上人のご下向をいたし、戦没者の追弔法要が盛大にとり行われ、これを皮切りに戦後播州一円の門徒の後追弔が本徳寺の行事として定着した。ある。現在では九月の一日曜日に播州門徒の追弔法要が、本徳寺の有縁の門徒を中心に執行されている。この夏も、九月七日午後一時から九月七日午後一時の遺族が参集し、厳かに法要が勤まる。



毎年9月に亀山本徳寺で修行される播州門徒追弔法要の様子